

『アイデア』『日本オルタナ出版史 1923—1945』は、清らかな写真と抑制のきいたレイアウトとによって、そこにある本それぞれの、最も美しい精神を取り出そうとしたかに見える。めくっているうちに、ある精神性を感じさせる、猛烈な「編集による詩」を見せつけられて、一冊一冊の本が、詩句のように胸に迫ってくるので吃驚する。それぞれの書物がしつかりとだれかによって造られたのだという確たる感覚、それを感じさせてくれるのは、オルタナ出版史が、著者や装幀家ではなく、出版者（＝公にする者）を中心に据えたからで、関東大震災から敗戦へと至る混乱期に「本を出版すること」へ己を賭けた人々の精神が、誌上に星座を描いている。それにしても、かかる美しい書物の隣にそつと添えられる、墨・横書から墨・縦書、やがて赤色・縦書へと次第に沸点を上げてゆくかに、ちいさな文字で書かれた過激なキャプションの数々のすばらしさはどうだろう。まるで墓碑の銘を読んでその刻主の心映えを言葉少なに讀めるような、心づくしの郡淳一郎の文章に、わたしたちは忽ち書物の胸底に導かれた心地になる。しかもそれらの文章は、ついさっきまでそこにいた人が書いたかのように切迫しているのである。

郡淳一郎が、『四季』（堀辰雄編輯）と『血と薔薇』（澁澤龍彦編集）との判型等の相似を簡潔に指摘し、この両編集長は、見識の高さとその美少年性によって、曲者揃いの書き手たち「世界の隅々に追い込まれている同志」（稲垣足穂）を組織し得た、と語り、きつぱりと「永遠の不登校児のような稲垣足穂に手を差し伸べ続けた堀と澁澤は、戦前・戦後を代表する雑誌文学者だった」と結ぶ時、この二人の辰年生れの作家＝編集者の辰雄・龍彦の精神史が浮かび上がる。いままで気づかなかった書物同士の星辰軌道が見えてくる……

世界が暗くなるとき、わたしたちは、いかなる天体の反映でありうるか。有限なるじぶんが、接続すべき精神はどこにあるのか。オルタナ出版史の宇宙について、夜のまんだらけで、郡さんに、訊いてみたい。

# 天体の反映

TALK SHOW

オルタナ出版史の宇宙

郡 淳一郎 オルタナ編集者

聞き手 結崎 剛 歌人

9/16

土曜日

夜8時開演

入場料 1,000 円

定員 50 名 要予約

まんだらけ中野本店  
4F 海馬イベントスペース

東京都中野区中野 5-52-15

Tel. 03-3228-0007



御予約 =ninomiya@mandarake.co.jp  
(QR コード及まんだらけホームページ参照)



《publueique》2017  
youquigo

求められたのは官能的快感、宗教的淨福感……世界と交際したい欲動であり、現実を超絶したい意志だった。つまり、近代日本の思春期において、中2病的な出版の初期衝動が連続発火してゆく一連のシーンを描き続けた。そして、本という位牌を拜んで、無縁仏たちの供養をしたかった。全部で31人。この特集全体が、31音からなるひとつの日本語の歌なのだと、思っていて構わない。

郡淳一郎「オルタナ出版史のためのプログラム」